



むかし、むかし、ずっとむかしのことや。
湯屋村ゆのやの近くに、あたたかいお湯がポコポ
コと湧き出ている小さな堤があったそうな。

「ああ、いい気持ちや」

「近い所に、こんなお湯があるのは、ありがたいことや」

「ほんとやなあ。ありがたいこっちゃ。湯につかっとると疲れやとれるのお」

「なんでも、お湯の中に薬がはいって、身体にいいちゅう話や」

「昔は、ケガをしたタヌキやキツネも、このお湯に入って傷を治したちゅうことや」

「それを見た昔の人が、ここに風呂場をこしらえたんやなあ」

村の人たちは、連れだって、そのお湯につかり、たんぼ仕事の疲れをとったりしていた。



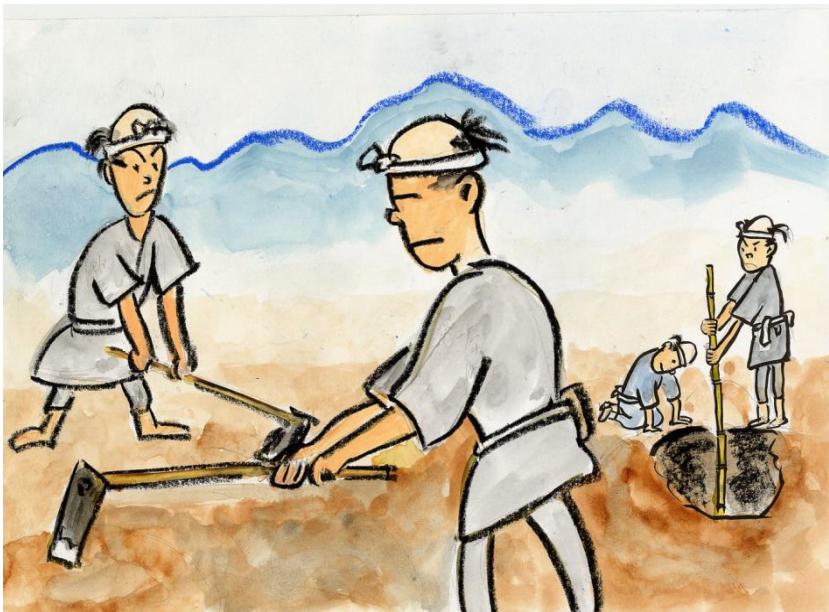


ところが・・・ある年の夏のこと。
これまでに見たことも、聞いたこともない
ような大水が出て、畑やたんぼを押し流し、
お湯のわき出ているところも土砂で埋めてし
まった。

大切な楽しみがなくなった村の人たちは、
どうしたものかと悲しんだ。

そうして、もう一度お湯が出んかと暇を見
つけては、お湯のわき出たあたりを掘りかえ
してみた。

そんな人たちの中に、たのむち辰口村の源助と小平
という兄弟がおった。





温泉掘りの話は、たちまち近くの村々にも聞こえ、しまいには、金沢の町の商人たちまでが、はるばるやって来た。

ところが、どこを掘ってもお湯は出ん。

「どんだけ掘っても、温泉なんか見つからんなあ」

「もうやめてしまうか」

その内、一人減り二人減りして、いつの間にか、みんな温泉を掘るのをやめてしまった。

それでも、源助と小平兄弟だけはあきらめずに掘っていた。

雨の降る日も、風の強い日も、雪が積もる寒い日でも、二人の姿を見かけない日はなかった。

「おお、今日も二人や掘っとるわ」

「お金もかかるがに、たいそうなこつちや」

はじめは、感心していた人たちも、しまいには、

「あんなだらなことで」と、言う人さえでてきた。

それでも二人は掘りつづけた。けれども、どれだけ掘っても、お湯は出てこん。





そんなある日のこと。

「源助兄や、うら、温泉掘るがやめようと思うがや。どんだけ掘っても、温泉が出るあてやねえし。お金もみんな使ってしまうた。うちの者はみんな、そんなだらなこことやめと言っし・・・」

「そんなこと言わんといてくれや。もうちよつこの辛抱や。頼む」となだめたり、すかしたりしたが、小平は頭を横に振るばかり。いっこうに、考えを変える様子がない。

そんなことのあった夜のこと。

源助の枕元に、お薬師やくし様が現れ、

「源助や、あきらめるでないぞ。村の衆は
前の手でお湯が出てくるのを待っておるの
ぞ。あきらめてはいけない。もっと、もっ
と掘るのだ。そうすると、大きな石に掘り
当たる。その石を取り除くがいい。きっと
お湯がふき出てくるはずじゃ」と告げた。

源助は驚いて目を覚まし、周りを見回
したが、そこには、お薬師さまの姿も何
もない。





次の日の朝、源助は暗いうちに起き、小平の所にとんで行って、お薬師さまのお告げの話をした。

小平は、何かにとりつかれた様子の源助に驚いて、源助兄の後についていつもの所に行くことにした。

そして二人は、いつもの二倍も三倍も、深く掘った。

するとどうだろう。

大きな石に掘り当たったではないか。





「お告げの石や。お薬師様のいわれた通り
や」

そして、その石をそおっと取り除くと

シューッ

高く高くお湯が噴きあがった。

こうして、二人の力で、村人たちの疲れをいやす楽しい場所がもどってきた。

二人はその近くに祠^ほを作り、薬師如来^{やくしにょぶつ}の仏像を祀^{まつ}った。

それ以来、この温泉は辰口^{たつぐち}温泉と呼ばれ、この地の人ばかりでなく、遠く離れた土地の人たちの、楽しくくつろぐ場所として今日まで賑わ^{にぎ}っている。

絵・後 泰夫





これは昔鍋谷村^{なべたに}の話や。

ある年のこと。

春から雨がよう降り続いて、夏になっても、

雪でも降りだしそうな寒い日が、何日も何日も

続いた。

田んぼの稲は、短く、枯れて白くなって、

細々と生えとるだけやった。

「今年も、米、とれんがでねえけ」

「食うもんな、なあもねえようになった。腹へって死んでもうわ」

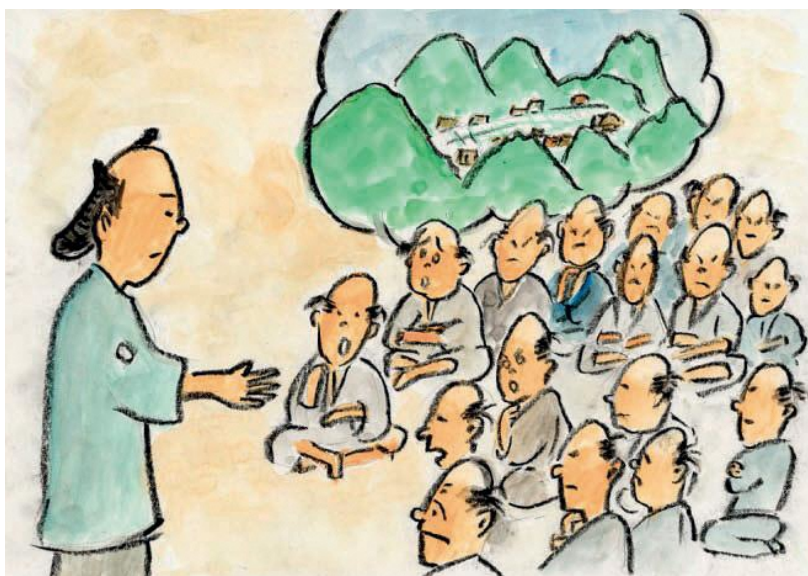
「山に生えとる草食うとつても、腹はふくれん。

和気の山の青土でも食わな、腹ふくれんわい」

「だらなこ言うとななま。昔、小松で、土を掘って食べたもんが、腹こわいて死んだという話、忘れたんか」

「そうやったなあ。前のききんのときや、石川の方で、隣村へ麦の粥かゆをもらいに行ったもんが、山の坂道を越えようと思っても、腹、すいとるもんで、上ることができずに、道端で死んでしまったという話も聞いたなあ」





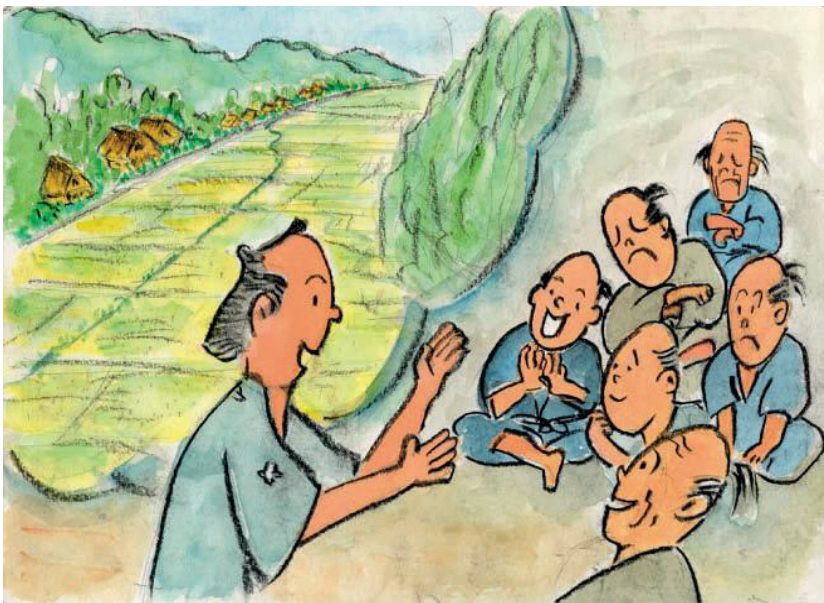
そんなある日のこと肝煎きもいりの庄兵衛どんが、村の人らを集めて、話しはじめた。

「今年も、ひどいきさんの年になった。食う米どころか、お上かみに出す年貢米ねんぐもやつのようや。このままじゃ鍋谷の村も絶えてしまう。そこでや、皆の衆や、よう聞いてくれ。今より、少しでも田んぼを広げて作りや、米もよけえられるし、年貢米出しても、くず米、だこもんくらいは残って、食うことぐらいやったらどうかなるやろ」

「庄兵衛さま、田んぼを増やすというても、鍋谷の村は山ばかりや、どこに作るがや」

「うん、そこでや、わしらに住んどる所を、
田んぼにするがや。今、住んどるみんなの家
は、向かいの北の方の山をくずいて、そこに移
すがや。そうすりゃ、家も、田当たりがよくな
る。何年かかるかわからんけど、鍋谷の村を守
るためや。どうや、みんなががんばってみ
か」

村人たちは、何が何やら分からなかったが、
肝煎どんの話でもあり、今より食えることがで
きるということで、だれも反対するものはおら
なかった。





庄兵衛どんは、お奉行様おぎやうさまのところに何度も何度も足を運んで、新しくたんぼを開くためのお願いをしに行った。

そして、やっとお許しが出て、村の西の端から順番に、山を崩して、新しく家を建てる家立ちの仕事にとりかかることになった。

ドーン ドーン ドーン ドーン

「あーあ、今日も、庄兵衛どんの太鼓をたたき音が聞こえる。今、山の仕事からもどったとこながに、また出んなん」

「あんた、肝煎様は親やと思えと、お上からきつく言われとるがいね。人夫に顔をださんだら、どんなきついお叱り^{しか}うけるかわからん。ダゴ作っておくから、はよう行ってくだされ」

庄兵衛どんのたたく太鼓の音を聞いて、村の男たちは、あちこちから、疲れた重い足をひきづりながら出てきた。

「毎日出ると疲れるわあ。たまに骨休めをしたいもんやなあ」





「庄兵衛どんも、たいへんなことを考えだしたもんや。いつになったら太鼓の音聞かんですむんやろ。毎日、毎日、山仕事と家立ちの仕事で、身体が持たんわい」

村人たちの中には、不満を言う者も出てきた。

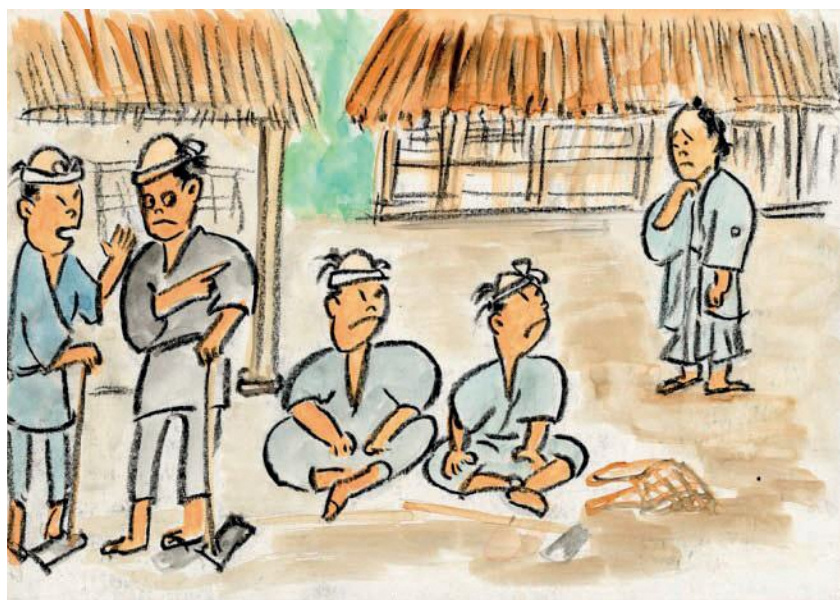
それでも、夜が明けると、すぐに太鼓の音になり始め、朝前に、ひと仕事をして、昼間は、自分の家の仕事を早く終わらせてから集まり、日が暮れるまで、雨の日も、風の吹く日も、雪の降る日も、毎日、毎日、続けられた。

家立ちの仕事が始まって、どれだけの月日がたったことやろう。

「もうこんなことはこりこりや、父ちゃんな倒れるし、米あ無くなった。庄兵衛どんの言われたことやとはいえ、なんでうららが、こんなひどい目にあわんならんのや」

「庄兵衛どんは、自分の手柄にしようとしとるがんないけ」

「庄兵衛どんの家には、財産があるからいいけどか、わしらは、毎日の食い米にも不自由してる。わしらのことを何も考えとらんがんないけ」
いつのまにか、庄兵衛どんの悪口を言う者や、仕事を怠ける者がふえてきた。





それでも庄兵衛どんは、黙って、村人たちの
先頭に立って仕事をした。

「困ったことになったもんや。ここで仕事を
やめれば、何にもならん。なんとかせんなん。

あのひどいききの苦しみを、また村のもら
にさせるわけにはいかん」

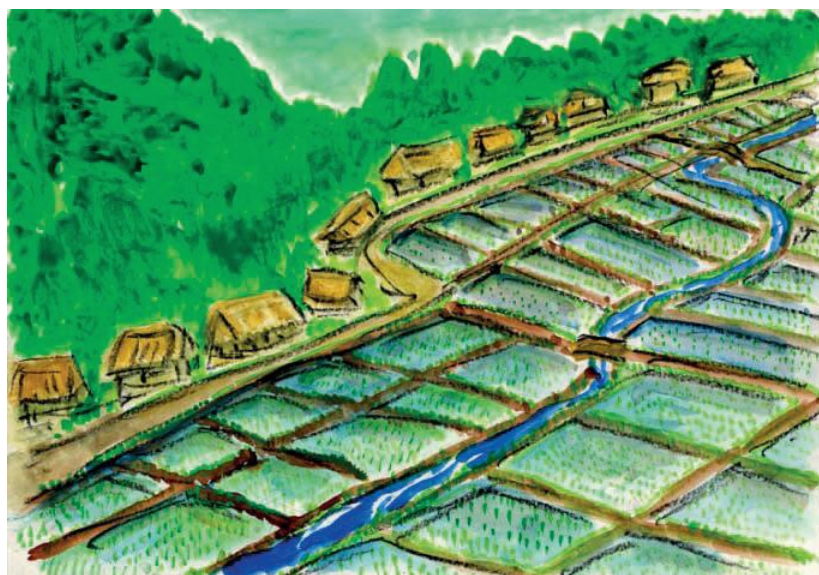
だれに言うわけでもなく、庄兵衛どんは黙々
と働いた。

「庄兵衛どん、もう仕事続けられん。くず米
ものうなつて、家のもんな、何も食うとらんの
や」

「おう、そうやったか。知らなかった。かん
にんしてくれ。今、米を持ってくるさけ、家の
もんに食わせてやってくれ。もう少しの辛抱
や、みんな、力をあわせてやってくれ。頼んま
いや」

庄兵衛どんは、食べ物ばかりでなく、仕事に
使う道具や縄など、必要なものは、黙って自分
が買って、村の人たちに渡しとったそうや。



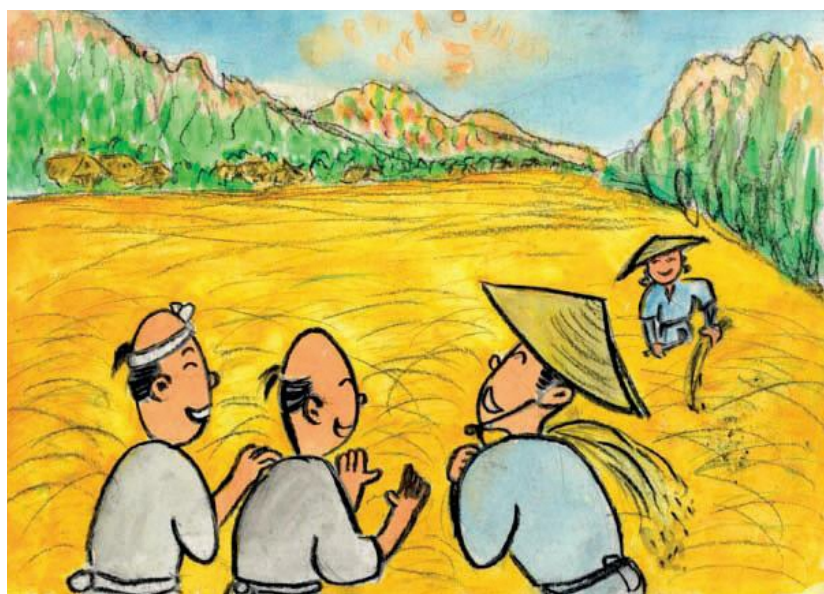


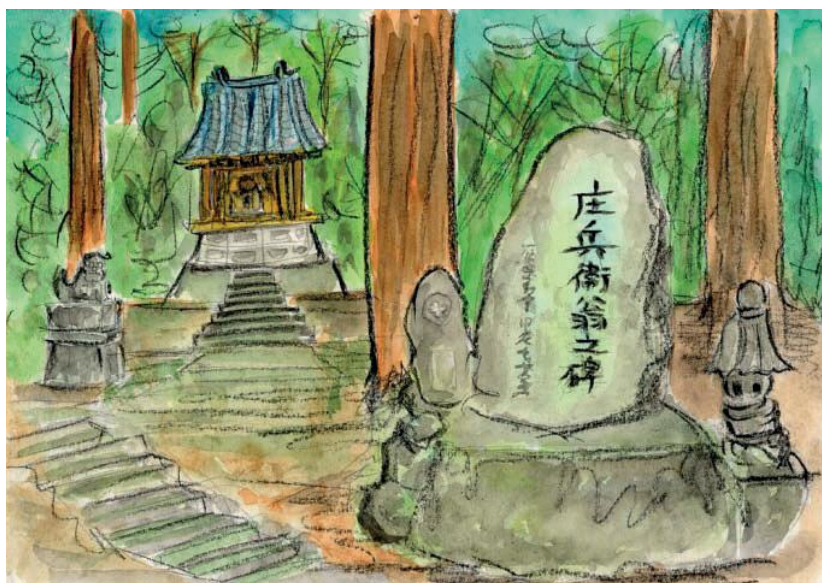
こうして家立ちの仕事が始まって十五年の
月日がたった。

鍋谷の村のすべての家が山の北裾^{きたすそ}に移り、
今まで、家の建っていたところはみことな田
んぼになった。

それからというもの、鍋谷村は、日当たりのいい場所に家移ったので、病気になる人が少なく、洪水があっても、高い所に家があるので、家が流される心配もなくなった。

そして秋になると、広くなった鍋谷の田んぼには、こがね黄金色のいなほ稲穂が波打っていたそうや。





しかし、庄兵衛どんは、たくさんあった財産も底をつき、長年ながねんの家立ちの仕事で体をこわし、六十三歳で亡くなった。

村人たちの悲しみはたいへんなもので、今まで文句を言っていた人たちも「庄兵衛どんは偉いお人やった」と言うようになった。

鍋谷の神社には、庄兵衛どんをまつ祀ったほくらが、鍋谷の家やたんぼを見守るように立てられている。

絵・後 泰夫



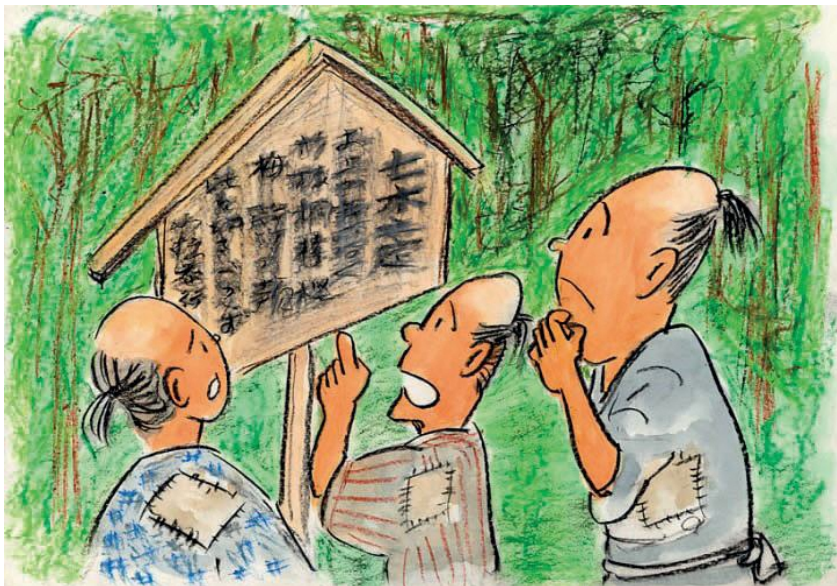
むかし、むかし、鍋谷なべたにの村に「きやちの源兵衛」という人がいた。

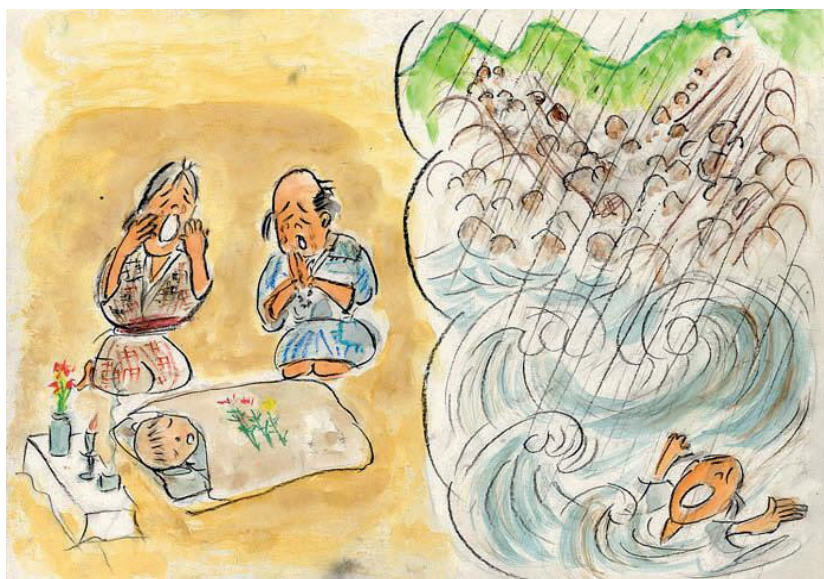
「きやち」というのは焼畑やきはたという意味で、自分の土地を持っていない人が山の斜面で畑をすという、貧しいお百姓さんのことやった。

鍋谷のお宮さんには大きな杉の木や松の木が
たくさんあった。

江戸時代、前田の殿様がこの辺りを治めてい
た頃、七木しちぎの法度はつて』というおふれが出されてい
た。

マツ、スギ、キリ、ケヤキ、カシ、ツガ、カ
ラタケの七種類の木は、自分の山の木であって
も、許しがなくては、切ってはいけないとい
うきまりだった。





今からおおよそ二百年くらい前の天明三年のこと。

どうしたことが、この年は春からずっと雨が降り続いて、おてんと様の顔が見られる日など、ほとんどなく、七月には洪水がおき、田んぼや畑は土や泥で埋まった。

食べるものもなくなり、村人は草の根をかじったり、蛙や蛇も食べた。中には、山の白い土まで食べ、おなかが詰まって死んだ人もいた。

あちこちの村では、体の弱い人や子供が、次々に死んでいったが、だれもどうすることもできなかった。

ある日のこと。村の人たちが、そろそろと肝煎きまひりどんの家に集まってきた。

「肝煎様、こんなことでは、みんな死んでしまいます。病人もたくさん出たし、ゆうべも、源六のかあがたおれたというし、なんとかしなければ」

「草も食ったし草の根も食った。蛙も蛇も、それこそ虫ケラまでも食ってしもた」

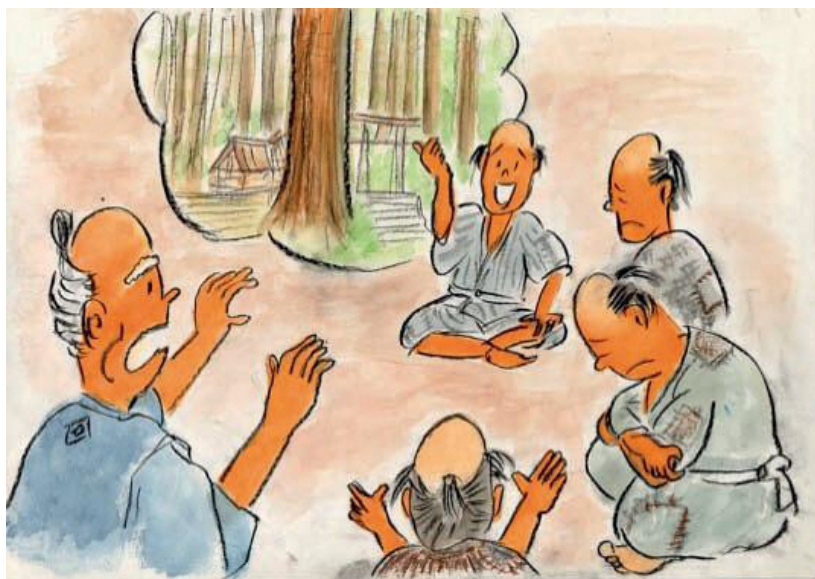
「もう、何も食べるものがなくなった」

「お奉行さまにお願いして、お蔵の米を分けてもらうという訳にいかんのだろうかのう」

「ばかな、そんな話を聞いてもらえるはずがない」

たくさんの方が集まったものの、誰もいい考えが浮かばない。





と、そのとき、「あのお宮の大杉を切って、美川で食べ物にかえることにしたらどうやるか」という者がいた。

「そんなことをして、もしお上に知れたら、それこそ死罪になるぞ！」

「おふれのことを気にしていたら、村中飢え死にや！生きるためには、そうするしかない」

こうして村人たちは、決して他人（ひと）には言わないことを約束しあって、お宮の杉を切ることにした。

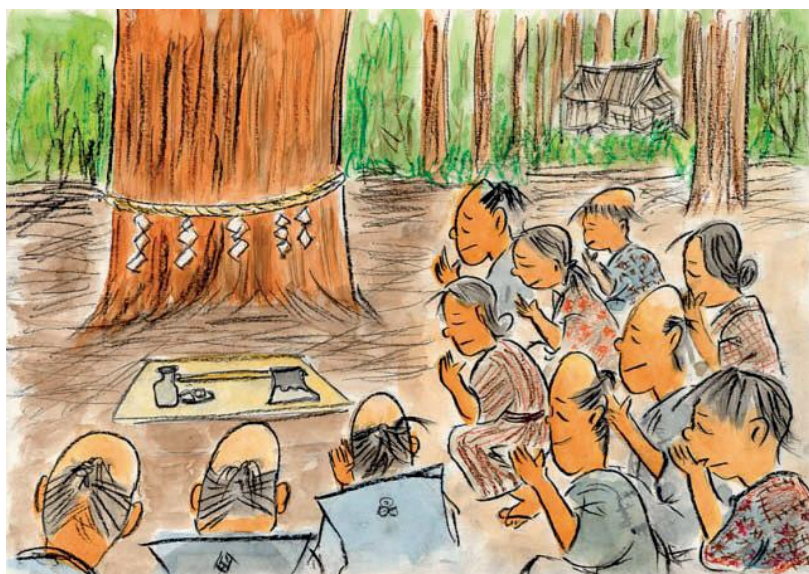
次の日、病人や子供をのぞいて、鍋谷中の人たちがお宮に集まった。

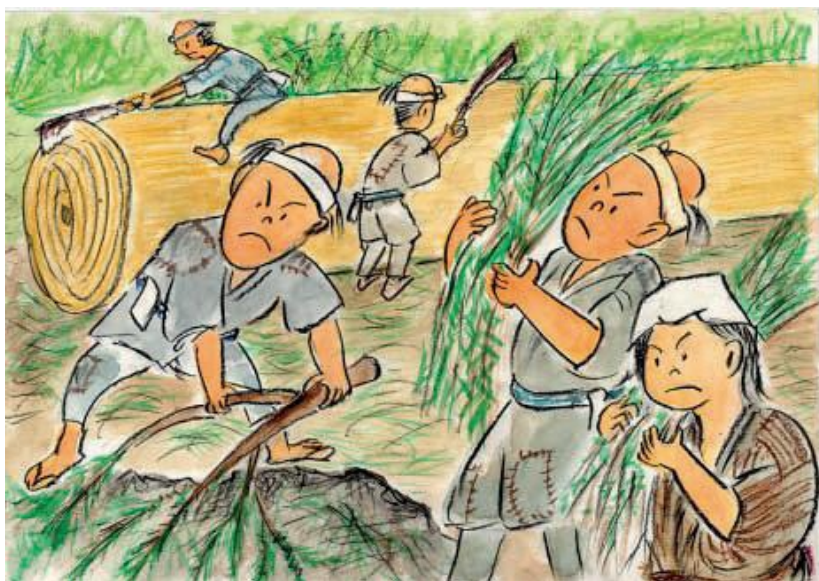
「どうか、木を切ることをお許してください」
みな、口々に言いながら、手を合わせお祈りをした。

カーン カーン カーン

神社一の杉の大木に、とうとうオノが入った。
どれだけの時間が経ったのか、ギシギシギシギシ
ギシギシギシギシ ギシギシと大きな音をたてて、大木は倒れた。

神社の前の田んぼを越えて向かいの山に先がかるほど、見事な杉の木だった。





さっそく、だれに見られても分からないように、切り株に土をかぶせ、落ち葉で隠した。

小さな小枝も、一本も残らずそれぞれが家に持ち帰り、あま（屋根裏）に隠した。

木挽^{こひ}きは、木を板にひき、そして、夜の間に美川へ運び、食べ物とかわえることができた。

ところが、しばらくたって、小松の奉行所から、
肝煎どんの家に使いが、書面をもって来た。

「今頃なんの知らせだろう」

書面を読んだ肝煎どんの顔が、またたくまに、ま
っ青になった。書面は

「鍋谷村で、お宮の木を届け出もなく切った者が
いると聞く。近く役人が出かけて調べる」というも
のだった。

肝煎の知らせで、村人たちは大急ぎで集まった。

相談は三日三晩続いたが、よい考えなど出るはず
もない。

みんな肩を落とし、聞こえるものは深いため息ば
かりだった。





いよいよ役人が来るという日の、夜明け近く、今まで隅の方で黙っていた、きやちの源兵衛が急に立ち上がった。

「いつまでもこんなことしとってもだちゃかん。

罰はうら一人で受けるさけ、ここあひとつ、うらにまかいてもらえんか。ただ、うらにも、かかあや子がある。うらがのうなったあと、あつらのこと、頼んます」と申し出た。

皆だまってしまった。

けれど、もうじき役人が来る。

だれ言うとなく

「頼めることではないが、お願い申す。かかあや子供のことは村中で引き受ける」

ということになり、源兵衛に任せることになった。

いよいよ夜が明けた。

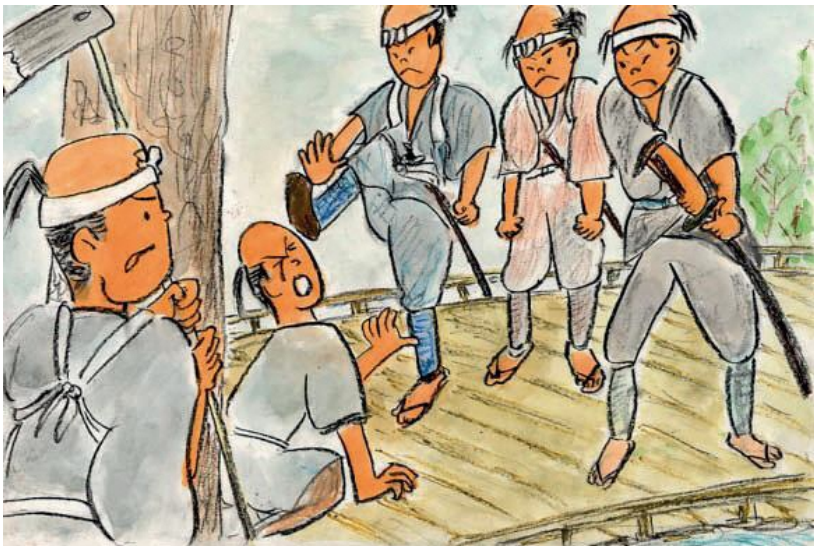
源兵衛は「折橋」^{おりはし}のたもとの草むらに身をお
き、役人が来るのを待った。

しばらくすると、三人の役人が折橋にやって来
た。

源兵衛はすかさず、役人の前に出て、道に頭を
すりつけて

「どうかお目こぼしを、生きるために私がやつ
たのです」と願いだした。

役人は源兵衛を足で蹴り、刀に手を掛けた。





このとき、近くに潜んでいた権兵衛ごんべえが走り出て、持っていた鍬くわで役人を打ちすえた。

源兵衛も他の一人の腕をしめあげ、地面にたたきつけた。

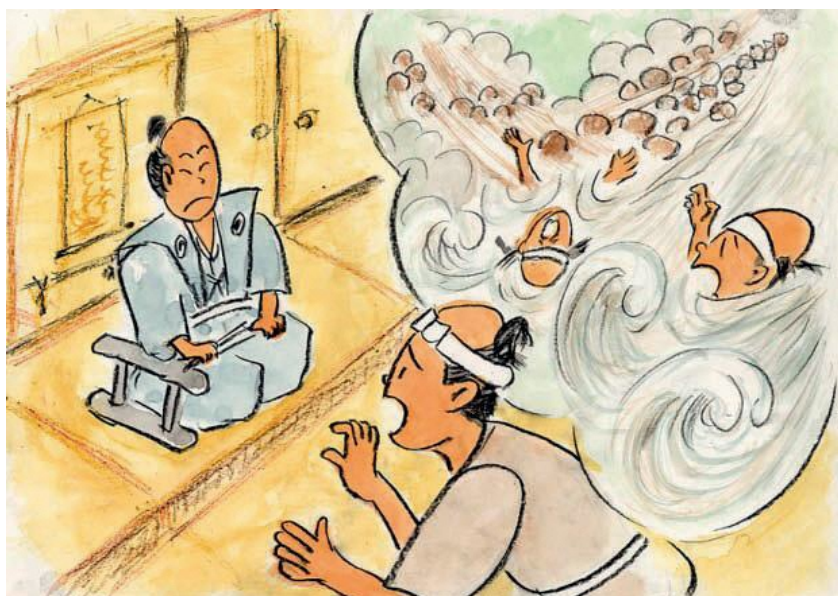
目の前で、連れの二人が倒れるのを見た残る一人は、手をすり合わせ命請いをした。

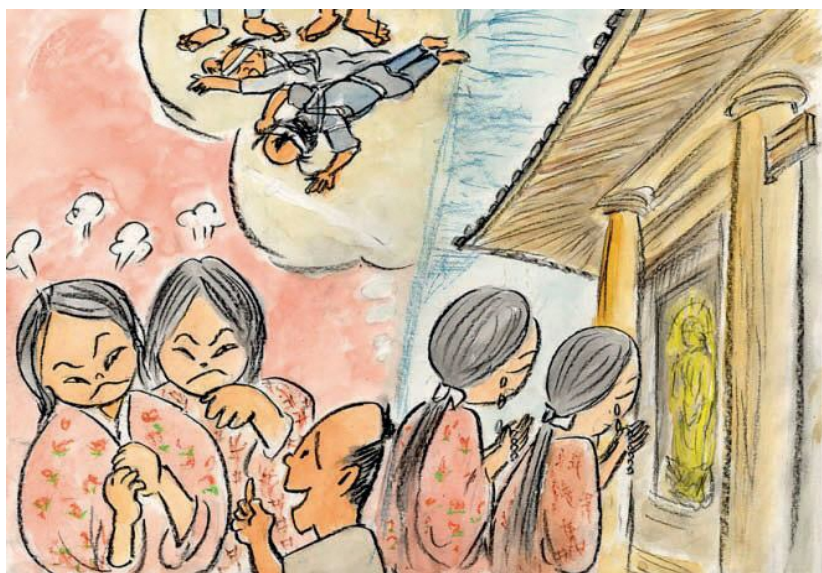
あわれと思った源兵衛は、決してこのことを他に言わないことを誓わせて役人を返した。

奉行所に帰った役人は

「鍋谷というところは、とても山がけわしいところで、途中でがけ崩れにあい、二人は川に落ち、行方が分からなくなり、私一人がやっと助かったのです。取り調べをしましたが、ご法度を破った様子はありませんでした」と報告した。

そして、亡くなった二人の役人の奥方に、奉行所で話したことに同じことを話した。





それから一年が経ち、主人を亡くした二人の奥方は、毎日涙にくれ、連れだっではお寺参りをし、旦那の冥福^{めいふく}を祈っていた。

そんな二人の姿を見て、生き残った役人は源兵衛との約束を破り、ほんとうのことを話してしまった。

それを聞いた二人は、驚き、すぐに奉行所に訴えた。

奉行所から役人がやってきて、源兵衛と権兵衛を召し捕り、村人も厳しい調べを受けた。

みんな、初めの約束のどおり、何も知りませんと言いつづけた。

奉行所では二人の厳しい取り調べが続いた。

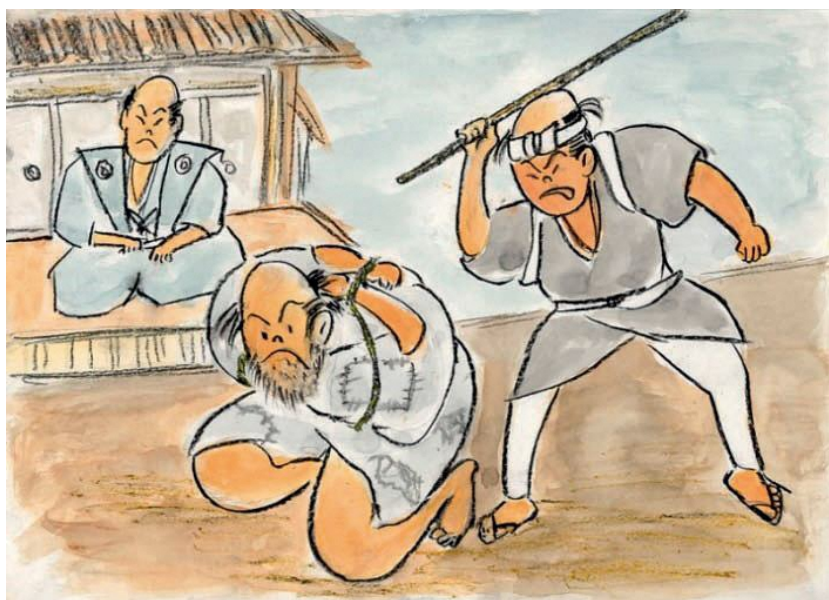
権兵衛は石責め、水攻め、百ただきなど、どんなつらい拷問にあつても

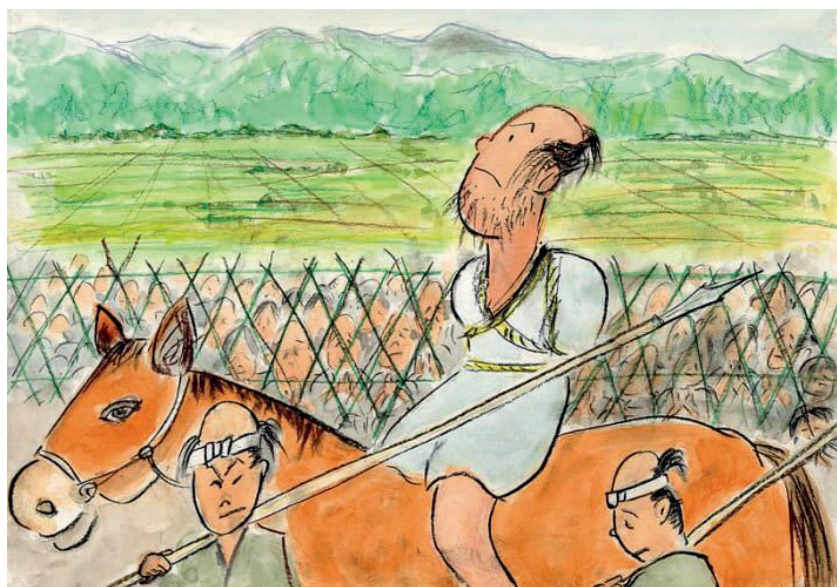
「あの日、私は一日山におつて、夕方、山から一人で帰って来たので何も知りません」と言い続けた。

やがて許されて牢からだされ、村へ帰ることができた。

一方、源兵衛は

「木を切ったのは私です。私一人で切りました。役人を殺したのも私一人です。どのようなお裁きでも受けます」と頭を下げた。





「あれほどの大木、おまえ一人で切れるはずがない他にもいるだろう。白状しろ」と、厳しい拷問を受け、責められたが、源兵衛はただ

「私一人です」と答えるだけだった。

ついに源兵衛に、死罪というお裁きが出た。

はりつけの源兵衛は、はだか馬に乗せられ、小松の町をひきまわされた。

ひげは伸び、やせ衰え見るもあわれな姿になった源兵衛は、ずっと目を閉じたままだった。

今江の刑場に着いたとき、源兵衛は目を開き、東の方の鍋谷の山を見やり、また静かに目を閉じ、竹矢来の中に消えて行った。

絵・後 泰夫